



Title	外国地名の漢字表記についての通時的研究
Author(s)	王, 敏東
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/39093">https://hdl.handle.net/11094/39093</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	王 敏 東
博士の専攻分野の名称	博 士 ( 文 学 )
学 位 記 番 号	第 1 1 5 2 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 6 年 8 月 2 9 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科 国文学専攻
学 位 論 文 名	外国地名の漢字表記についての通時的研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 前田 富祺 (副査) 教 授 山口 堯二      助教授 蜂矢 真郷

## 論 文 内 容 の 要 旨

国語語彙の中で、地名は重要な位置を占めている。しかし、国語語彙としての地名の研究はあまり行われてこなかった。特に、外国地名は、その地名の原音がどのようなものであってそれとどのように関わるかに考えるべき問題があり、また、その土地を表した中国の漢字表記の影響を受けることの多いことが研究を困難にしている。本論文は、外国地名の表記、特に中国と関係の深い漢字表記の問題を中心に、その表記の変化の全体を捉え、通時的に検討してゆくことを目的としているのである。本論文では、古代から現代に至る多くのジャンルの文献から用例を集め、表記の変化の過程を明確に捉えるようにするため、地名ごとに集めた用例を符号化し中国の用例と日本の用例とに分け、それぞれ年代順に配列し対照した図を作成して検討している。これによって、日本における表記が中国における表記とどのように関わりながら変化しているかを明らかにすることができたのである。

本論文は主論文202ページ(400字詰め原稿用紙で約600枚)と資料篇123ページからなる労作である。なお、調査に用いた五百点あまりの資料の詳細は論文の資料篇に提示している。

以下、本論文の構成およびその内容について章ごとに述べてゆく。

### 第一章 序章

本章では、最初に外国地名の研究史を概観するとともに、従来の研究に欠けているところを明らかにし、本論文のような研究方法を取るに至った理由を述べている。今世紀に入って地名の研究は世界各地で盛んになってきているが、国語学的な外国地名の研究は、現在でもまだ十分進められていない状態である。ここでは、外国地名の漢字表記の成立、変化の過程、変化を引き起こす理由などを明らかにするために、中国の表記を参照しながら一つ一つ通時的に検討することの必要性を述べている。本論文では外国地名の漢字表記を、中国における表記にまで遡って、通時的に地名ごとに検討した上で総合しようとしているのである。

### 第二章

本章では外国地名の漢字表記がどのように成立したかを検討し、(一)音訳地名、(二)意識地名、(三)その他、の三つに分類する。音訳地名は、更にその地域が中国(または日本)に知られた時期によって三類に分けられる。

(一) 音訳地名：その地名の原音によって訳したものである。

1 中国の周辺にあるか、または古くから中国（または日本）と交流のあった地域の地名。

2 主にマテオ・リッチの『坤輿萬國全圖』（一六〇二年）の紹介によって中国（または日本）に知られた地名。  
たとえば、アフリカや欧米の地名がこの類に属している。

3 マテオ・リッチ没後の一六一〇年以後に知られた地名。中国を経由せず、または中国の影響をあまり受けず、原音が直接日本に入った地名。「オーストラリア」や「ニュージーランド」がそれに当たる。

(二) 意識地名：「紅海」「地中海」「太平洋」のように意識された外国地名である。

(三) その他：以上の（一）（二）のいずれにも属していない、かなり独自の性格を有しているものである。たとえば、「大西洋」は、一時「亜太鯨海」という音訳表記が用いられたが、後に「大西洋」という中国で命名された呼び方が用いられるようになったのである。

(一) の1として「アラビア」「インド」「ペルシャ」など、(一) の2として「アフリカ」「アメリカ」「ドイツ」「フランス」など、(一) の3として「オーストラリア」「ニュージーランド」など、(二) 意識地名として「紅海」「地中海」「太平洋」など、(三) その他として「カスピ海」「大西洋」など、それぞれの外国地名の表記の変化が通時的に示されている。

なお、本章では現在でもよく使われている外国地名の略称についても述べられている。現在、外国地名は片仮名で表記されることが多い。しかし、「日米交渉」などのように地名を合わせ呼ぶ時には、外国地名の漢字表記の略称が用いられている。漢字による外国地名の略称表記の多くは、十九世紀の後半に発生し、その後、一部が一般的に用いられるようになった。なお、複数の地名を並列する場合、中国では「中日」、日本では「日中」など、それぞれ自国を先に挙げる形で用いられることが多いのである。

### 第三章

音訳地名には、漢字一字一字で一つの音節を表すという万葉仮名的な表記法がある。ここでは、このように音節を単位として地名を表す漢字の用法について検討した。たとえば、「ア」が含まれる外国地名を例とすると、「アジア」では「亜」を常に多く用い、「アフリカ」では最初「亜」を多用していたが、後には「阿」を多用するようになったことなどが明らかにされている。

また、以上の調査を通して、中国の『坤輿萬國全圖』（一六〇二年、マテオ・リッチ）、『海録』（一八二〇年、謝清高口述、楊炳南筆記）、『四洲志』（一八三九年、林則徐）、『海國圖志』（一八四七年、魏源）などの資料が日本の表記に大きな影響を与えたことが明らかになった。一方、日本では『世界國盡』（一八六九年、福沢諭吉）が外国地名の表記において、独特な位置を占めていることが分かった。

### 第四章

第四章では第二章、第三章での個別の地名の検討を基礎とし全体を総合的に検討している。

音訳地名では「印度」「亜細亜」など、中国の表記を日本でそのまま採用したものもある。しかし、漢字音が日中で異なるために、日本では中国から取り入れた表記を日本語の発音に合う表記に変える場合も多い。なるべく原音に近い形を取ることが音訳地名の第一の原則となる。

次に、同音異義の漢字の中から、筆画数の多少、その漢字の持つ意味などによって漢字を選ぶということが第二の原則となる。

筆画数の多少については、多くなる場合と少なくなる場合という二つの方向がある。日本の表記で、「アフリカ」の「フ」に「拂」「佛」より「弗」が優勢になってゆくことや、「アメリカ」の「メ」に「墨」より「米」が多くなることは筆画数が少なくなる方向の例である。一方、中国および日本の表記で、「イギリス」を「英吉利」で表す場合などは、筆画数が多い形を選ぶ例である。このように複雑な字を用いることがあるのは、「英」「吉」「利」のようなあまり使われない漢字を使うと、「外国地名」であることを読者に視覚的に訴えることができると考えたからであろう。

日本の表記で、「亜非利加」が使われなくなった例などは、日本語の発音に合わないこととともに「非」という字の印象が嫌われたためかと思われる。一方では、漢字の表意性を生かした例もある。たとえば、中国の表記で「オース

トラリア」の表記に三水偏のない「奥」より三水偏のある「澳」をよく用いているのは、オーストラリアが「海外にある」「水に囲まれた」国なので、その「水」のイメージを表現しようとする意識があったためと思われる、日本の表記で、「濠」が用いられるようになるのも同じような意識があったためと思われる。

意識地名は音訳地名ほど表記の変化が激しくない。意識地名であれば、使用者はまずその意味を理解でき、イメージがそれに伴っているので、定着しやすかったのである。たとえば、「地中海」「紅海」などの例がそうである。また、中国で命名された「大西洋」なども日本が中国の言葉を受け入れた例である。

全体として、日本における外国地名の漢字表記は中国からの影響を相当に受けている。しかし、日本は中国で作った表記を取捨し、日本に適する表記を受け入れ、そうでない場合は日本独自の表記に変えてきたのである。

## 論文審査の結果の要旨

現在、ほとんどの外国地名は片仮名で表記されており、教科書、新聞などの表記はほぼ統一されている。しかし、過去においては外国地名は漢字表記されることが多く、しかもその漢字表記は極めて多様であった。外国地名がいつ頃、どのように表記されていたか、どうしてそのように表記されたかは問題である。国語語彙の中で地名は重要な位置を占めている。しかし、国語学における地名の研究、特に外国地名の研究はまだ十分進展していないと言わざるを得ないのである。近年、鏡味明克氏によって日本の地名についての研究がなされる一方、外国地名については西浦英之氏、佐伯哲夫氏、荒尾禎秀氏などが幾つかの論文を発表している。しかし、いずれもかなり限定された資料における共時的な研究か、一部の外国地名の限定された研究である。したがって、外国地名の研究は重要であるにもかかわらず、その表記の変化、変化をもたらした原因など、地名ごとに、研究すべきことが多く残されているのである。本論文は日本に大きな影響を与えた中国の文献にまで遡り、中国との関わりを考えながら個別の地名表記を検討するとともに通時的に全体的に外国地名の漢字表記を論じた最初の論文であると言えよう。

本論文の評価すべき第一の点は、これまであまり利用されなかった新しい資料を利用し、できる限り多くの用例を集めて、検討しているところである。資料は資料篇に示したように歴史書、地理書、地図、紀行文、教科書、節用集、百科辞典など、中国の資料を合わせて五百点あまりに達する。このように新しい多くの資料を調査したからこそ、一々の地名の変化の過程を明らかにすることが出来たのである。

第二に評価される点は、漢字表記された外国地名を全体的に調査し研究したことである。これまでの外国地名の研究には、荒尾禎秀氏等の研究があるが、「イギリス」など特定の地名に限られていて、全体の見通しをつけるに至らなかった。外国地名の全体を対象とすることによって、「アメリカ」を「米国」などとするような略称化の流れ、「アフリカ」「アメリカ」などの「ア」に共通する「亜」「阿」などの文字がどのような地名に用いられるかなど、外国の地名表記の特色を全体的に捉えることができたのである。なお、本論文によってはじめて個々の外国地名の表記の変化が明らかにされたものも多い。

第三には外国地名の全体の傾向を通時的に体系的に明らかにしたことが評価される。これまで佐伯哲夫氏、西浦英之氏等の調査があるが、時期は幕末から明治初期に限られているか、ジャンルが新聞に限られた報告であった。本論文ではなるべく広いジャンルにわたって用例を集めるとともに、時代的に遡ったり、中国の用例との関わりを検討したりして全時代的な変遷を明らかにしている。ここでは図に示すことによって、外国の地名表記の中国と日本との類似・相違が明らかにされ、日本がどのように中国の影響を受け、また、どうして中国と異なる地名表記を用いるようになったかを明らかにすることができたのである。

以上のように、外国地名における漢字表記の通時的な研究をすることによって、地名自体の表記の変化を明らかにすることができたばかりでなく、用字法・当て字全体で考えるべき問題についても示唆を得ることができた。

もちろんこの調査の範囲では用例数が足りず十分な変化を明らかにすることのできなかつた外国地名もある。それらの外国地名の変化の時期や変化の理由を明らかにするためには十分な用例を集めることが必要である。また、中国

自体の地名表記についても明確でない点があり、今後の調査も必要である。地名語彙全体の中での外国地名の位置付けも問題となろう。しかし、それらは今後の課題となるもので、本論文が個々の外国地名の表記の変遷の実体を明らかにするとともに外国地名の表記の全体を通時的に検討し、変遷の見通しをつけたところは高く評価されるのである。したがって、本論文は博士（文学）の学位申請論文として、十分な価値を有するものと認定する。